

有識者会議報告をふまえた附属学校園の改革

- 0 はじめに 教員養成の特徴 一成果を改革へ----- P2
- 1 ガバナンスと連携の強化----- P3
- 2 2地区2附属の必要性----- P7
- 3 高松学園、坂出学園の特色と役割分担----- P8
- 4 高松学園の改革----- P9
- 5 坂出学園の改革----- P16



協力

附属高松学園



香川大学教育学部

0. 教員養成の特徴—成果を改革へ—

<独自性>

- ・大学院に特別支援教育コーディネーター専修を開設(2008年)
- ・教育学部改組(2015年)と独自の科目・領域
 - ・特別支援教育基礎論
 - ・学級経営論
 - ・初等授業研究
 - ・学校防災論
 - ・生活・総合領域
- ・教職大学院の開設(2016年)

・教職大学院の拡充(2020年～)

- ・特別支援教室「すばる」開設(2003年)
- ・特別支援教育促進事業(概算要求特別経費、2005-09年)
- ・理数系教員(CST)養成拠点構築事業(科学技術振興機構、2011-14年)

※人間発達環境課程の募集停止(2018年)

- ・道徳ラボ(教職支援機構事業、2016年～)
- ・香川県教員等人材育成指標に基づくスクールリーダー養成・研修プログラム開発—ラーニングポイント制導入に向けて—(教職員支援機構事業、2019年～)
- ・発達障害の可能性のある児童生徒に対する教科指導法研究事業(文部科学省特別支援教育課、2018年～)

・総合大学院の開設(2022年～)

1. ガバナンスと連携の強化

<継続>

- ①附属学校園運営会議
- ②学部・附属連絡協議会
- ③六附属連絡協議会
- ④各学園連絡協議会
- 学部・附属学校園教員合同研究集会(通算19回)
- 学部教員と附属学校園教員による共同研究プロジェクト

<新たな取組>

- 附属学校の在り方懇談会(2017年10月～、7回)
- 共同研究プロジェクトの質的転換(附属の研究への協力)
- 高松市教育委員会との連携協力(協定の締結)

学長(学長戦略室), 理事

<①附属学校園運営会議年2回>

報告
意見評価

- 香川県教育委員会
- 香川県教育センター
- 東部教育事務所
- 西部教育事務所

* 指導主事の約50%が
附属経験者

<②学部・附属連絡協議会年3回>

学部長

- 附属担当副学部長
- 学部事務課長

- 教育研究評議員

- 教職支援開発センター長

- 学ボラ委員長

- 教育実習委員長

<③六附属連絡協議会年3回>

- 附属坂出学園
- 附属高松学園

学部附属学校
合同研究集会

<④坂出学園連絡協議会>

<④高松学園連絡協議会>

<働き方改革に向けて>

- 附属学校教員の勤務時間確認簿の
様式の変更(香川大学職員の様式に
揃えるとともに、教員に特殊な勤務に
ついても考慮したものへ)
- 在校時間、勤務時間の適正な把握と
対策の検討・実施
- 各学校園ごとの業務・行事の見直し

市町教育委員会

県市校長会

市町幼・小・中・こども園

県立特別支援学校

香川県小・中学校研究会

* 附属教員が事務局研究部

* 多数の附属経験者が要職に

全附連、教大教、四附連
地区別勉強会

課題

- ・附属学校園の予算の確保
- ・附属事務の連携による機能強化と
効率化
- ・施設の老朽化対策・安全確保

1. ガバナンスと連携の強化

大学のガバナンスのもと、地域教育機関との連携が進んでいる例

【香川大学】高大接続・教育委員会と連携した香川県立坂出高校教育創造コースへの協力

- 香川大学教育学部との連携により、2017年度に県立坂出高校に「教育創造コース」が創設された。このコースの教育プログラムに対して、教育学部と附属学校園が協力している。とくに教育プログラムの中心となる総合的な学習の時間に、大学教員による出前授業、グループ研究へのアドバイス等の支援を行うとともに、附属学校園が実践的な学びのフィールドを提供している。
- 坂出高校教育創造コースの生徒たちは、1年次に附属坂出小学校を4回、2年次には附属幼稚園を3回、附属坂出中学校を2回、附属特別支援学校を1回訪問した。幼稚園では園児と一緒に遊び、小学校では教科学習の補助や給食指導を行った。
- 県立坂出高校「教育創造コース」の創設と教育プログラムへの協力、さらには入試改革を含む高大接続の取り組みにより、県内高校出身の教育学部志願者を安定的に確保し、高校段階から地元で働く教員として必要な資質能力の素地を養うことができる。



1. ガバナンスと連携の強化

大学のガバナンスのもと、地域教育機関との連携が進んでいる例

2. 県教育センター教職員のオンライン研修に貢献

○附属学校園運営会議にて

<県教育センター長より>

出張の抑制、働き方改革により一堂に会しての研修がとりにくくなつた。教職員対象のオンライン研修を開設させたいがセンターには子供がないので指導主事の模擬授業で作成している。

附属のモデルとなる授業のビデオを提供してほしい。

<附属学校園>

研究授業等のビデオ撮影は簡単だが、ビデオを研修用に編集するのに教員の負担がかかる。

<教育学部長>

教職支援開発センターにビデオ教材作成の部門があるから活用すればよい。

<教育学部教職支援開発センター長>

附属から案内があれば、撮影・編集を行う。大学生や大學生の授業でも活用させていただきたい。

県教育センター：一堂に会しての研修がとりにくくい



教職員対象オンライン研修の開設



附属：モデルとなる
授業のビデオ提供

学部：撮影、編集に協力
学生・院生にも活用

3. 法令研修に新しい「しあわせ」でWIN-WIN

○附属学校園運営会議にて

<県教育センター長より>

新しい法令研修(中堅教員研修Ⅰ、7年経験者研修)に附属の場を活用したい。自らの授業実践を附属に持って行きアドバイスをもらいたい。受講者が小中合わせて200名程いるので、両附属学園の全員の力を借りたい。特別支援に関心がある受講者には附属特別支援学校の力を借りたい。

<附属学校園>

公立の若手の先生方の悩みを知り、附属の研究成果や授業技術を伝えることができる。ここでつながりをつくり附属の日常の研究授業・討議や研究会に参加してくれるとありがたい。

<教育学部長>

公立のニーズを知る絶好の機会。公立の先生とつながりをもち共に授業について考えていく仲間なってくれれば、効果的な研修となる。2地区2附属で進めるとよい。

<県教育センター長>

この研修を機会に、公立の若手教員が附属とつながり、やがて附属の授業や研究にあこがれ、附属で授業がしたくなる教員に育つことを願っている。

県教育センター：附属教員による法令研修の場の位置づけ



附属の日常の研究授業・討議に参加

つながりから
あこがれへ

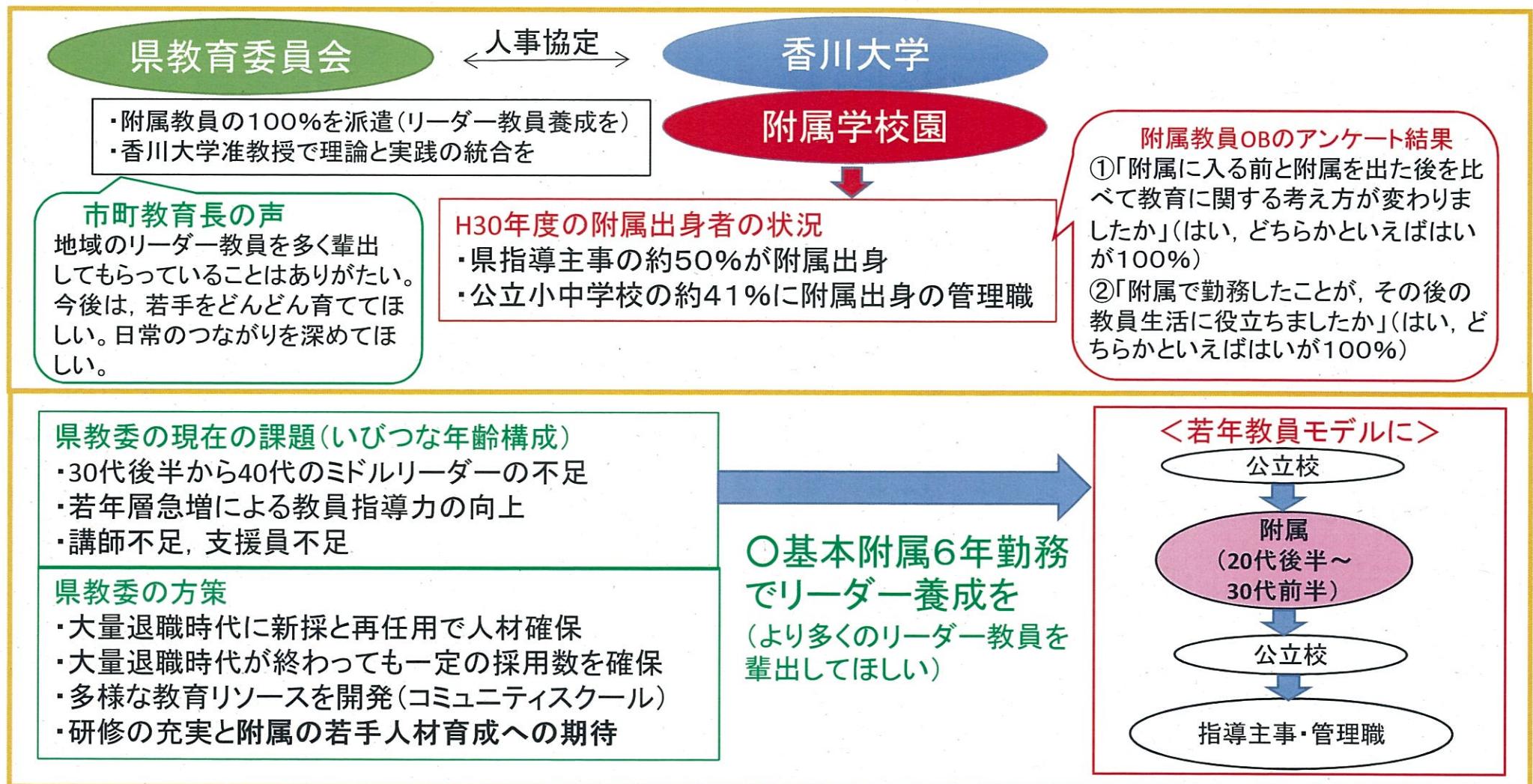
附属で授業
がしたい

↑
県教育センター

↑
香川大学

1. ガバナンスと連携の強化

県教育委員会、市町教育委員会と連携して地域のリーダー教員を育てる附属学校

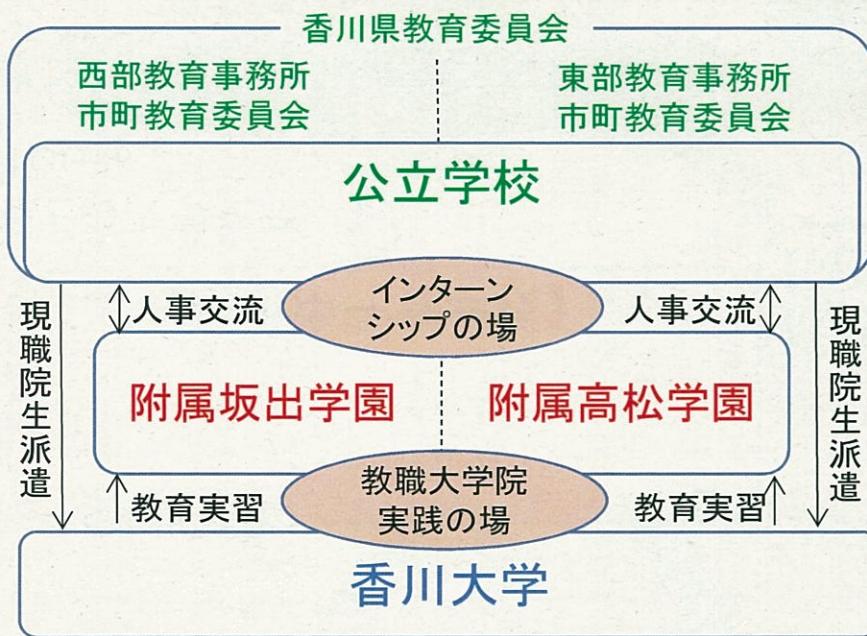


課題

- 6年間で若手を育てる研究システム
- 将来有望な若手教員へのアプローチと人事交渉
- 学校運営の核となるミドルリーダー獲得及び勤務年数の人事交渉

2. 2地区2附属の必要性

(1)リーダー教員育成、教員養成、教員研修の役割



<義務教育課長、市町教育長、事務所長の声>

- ・地域のリーダー教員を多く育てるために、西部地区、東部地区にそれぞれ附属が必要。
- ・H33年度以降も、香川県は多くの新規教員を採用する。教育実習並びに教員研修学校の役割をしっかりと果たすためには2つ必要。
- ・2つの附属が地域のモデルとなる授業を見せてほしい。

<校長会長>

- ・附属で5週間実習した学生が公立校で2週間実習し、その後も継続して自主的に週に1回来てくれている。附属を核としてこのような学生を増やしてほしい(インターンシップ事例)。



「教職大学院生の実践授業研修」

<現職院生派遣校校長>

- ・教職大学院や附属で学んだことが本校で活かされている。

(2)地域の教育研究団体推進の役割



<香川県小・中学校研究会長の声>

- ・2つの附属が香川県小中学校研究会のみならず、自主的に同好会の事務局と研究部を分担してくれているから発展してきた。
- ・新しい教科の外国語、道徳、生活総合なども附属が中心となって進めてほしいが、附属教員の数が足らないのが残念。

<教育事務所長>

- ・この研究会が基盤となり、各教科の同好会が生まれた。授業について深く考える場を大切にしてほしい。両附属の一層の切磋琢磨を期待する。

<研究発表校校長>

- ・継続した指導から会の運営にわたり、附属の先生方にお世話をなった。

<附属教員OB>

- ・附属の研究だけでなく、この会や公立学校の現教指導の場が力量を高めてくれた。

3. 高松学園, 坂出学園の特色と役割分担

香川県の求めるもの(県からの要請及び市町教育長聞き取りより)

- ・幼小中の接続
- ・小中の系統だった教科指導
- ・中高接続(高校教員研修)
- ・坂出高校教育コースへの協力
- ・異校種間での研修
- ・虐待, 不登校, いじめ等に関する親子関係
- ・子供と保護者の心の支援

- ・香川に生きる子供の育成
- ・リーダー教員の育成
- ・教員養成, 教員研修
- ・モデルとなる授業の公開
- ・日常の附属とのつながり
- ・働き方改革等幅広い意味でのモデル提供
- ・こども園への貢献
- ・インクルーシブ教育, 特別支援教育
- ・コミュニティースクール

- ・子供会等の機能低下による異学年交流の不足
- ・創造的な学びの場の不足
- ・次世代を生きる子供に必要な能力を身に付ける新しいカリキュラムの開発
- ・グローバル化への対応

<坂出学園>

<坂出・高松共通>

<高松学園>

<坂出学園>

- 幼・小・中の一貫した学び
- 発達支援, ユニバーサルデザインの視点からの充実

【幼小中一貫学校】

県との人事交流
100%

西部管内公立学校教員

- 小・中・高・就職までの一貫した学び
- 地域のセンター的役割

【特別支援学校】
【特別支援教室すばる】

県立特別支援
学校教員

- 次世代を生きる子供を育てる
カリキュラム開発
- 県内のグローバル教育を牽引

【幼稚園】 【小学校】 【中学校】

東部管内公立学校教員

4 附属高松学園と地域の課題と改善素案

附属高松学園の課題

- ・小学校と中学校の連携教育が生かせていない。
- ・研究成果の内容が公立学校に還元されているかどうか把握できていない。
- ・教員研修の場となるような地域貢献が十分ではない。
- ・教員の長時間勤務。



課題に対する改善案

- ・創造的活動を中心に小・中カリキュラムの連続性を強化。
- ・公立校教員の研究参加により研究成果を還元。
- ・研究集会の公開や研修指導者として附属教員を派遣。
- ・教員の意識改革を進める。

地域の課題

- ・教員の世代交代によるミドルリーダーの不足
- ・教育のグローバル化を一層推進する必要性。
- ・若年教員の増加に伴う研修機会の確保。



課題に対する改善案

- ・附属校が研修ステージとなるよう人事異動のサイクルを早める。
- ・IB教育を参考にグローバルリーダーを育成する教育を推進する。
- ・高松市と協定を締結し、研修の一部を附属校で実施する。

未来・世界を見据えて香川で学ぶ学校づくり

創造(表現)活動



これから時代に生きる
子どもたちに必要な資質・能力の育成を追究

①次世代を生きる
子供を育てる
カリキュラム開発

②グローバル化への対応

③地域教育への貢献

国際バカロレア教育
プログラムを参考に
世界的な視野で考え
られる子どもの育成

県教委や市教委と連携し、
研修や人事交流を通して
人材育成に貢献

連携協定(新規)



高松市教委

①次世代を
生きる子供を
育てるカリ
キュラム開発

課題解決型の学習や
体験型の学習の中で
自分の意見や思いを
伝え合う活動を意図
的に設定



新たな価値を創造的
に思考する力の育成
を目指す

これから時代に生きる子どもたちに必要な資質・能力
の育成をめざした創造的カリキュラムの継続的な研究

【高松小学校】

H25～H28
2領域カリキュラムの研究
(教科学習、創造活動)
分かち合い、共に未来を創
造する子どもの育成

* 異学年の交流を促進する
縦割り活動

【高松中学校】

H27～H31
「創造表現活動」領域を設置した
カリキュラムの研究 (教科学習、
創造表現活動)
「コミュニケーション能力」「創造
的思考力」の育成
* 学年のプロジェクト型活動や
学級単位の表現活動

身近な人・地域から他国や異文化の理解へつながる学び

【背景にある課題】

・新たな学び方への転換(探究・フィードバック)が急務である。

②グローバル化 への対応

国際的な視野をもつ人間の育成

世界標準の教育である国際バカロレア(IB)の教育プログラムを参考にグローバルな視野をもち、より良い世界を築くことに貢献できるグローバルリーダーとなる人材を育成する。



留学生との交流地域
(大学や地域の専門学校
との協力)
* H30はのべ160人と交流



中学生のための第二外国
語講座（フランス語）
* O B会の協力で希望者
が参加

【背景にある課題】

- ・変化する社会に対応するグローバル人材の育成が急務。

- ・文部科学省が国内推進体制を整備し、国際バカロレア認定校を2020年度までに200校以上の設置を目指している。

③地域教育 への貢献

県教委や市教委と連携し、教員研修や人事交流を通して人材育成に貢献する

香川県教委

連携協定

香川大学
教育学部

連携協定
2019.3

高松市教委

- 香川県教育センターとの連携
 - ・初任者教員研修や中堅教員研修の一部を受け入れ
 - ・研修の指導者、助言者として附属教員を派遣

【背景にある課題】

- ・若年教員の急増で教育センターでの研修力強化が急務

- 高松市総合教育センターとの連携
 - ・初任者教員研修や中堅教員研修の一部を受け入れ
 - ・研修の指導者、助言者として附属教員を派遣
- 高松地区研修会に参加
 - ・高松地区校長研修会・教頭研修会等に参加し、情報交流
 - ・高松市の施策と共同歩調で教育課題の解決に取り組む
- 附属高松園舎と高松市幼稚園間の教諭の人事交流
 - ・幼稚園教諭の資質向上をめざす

未来・世界を見据え香川で学ぶ学校づくり

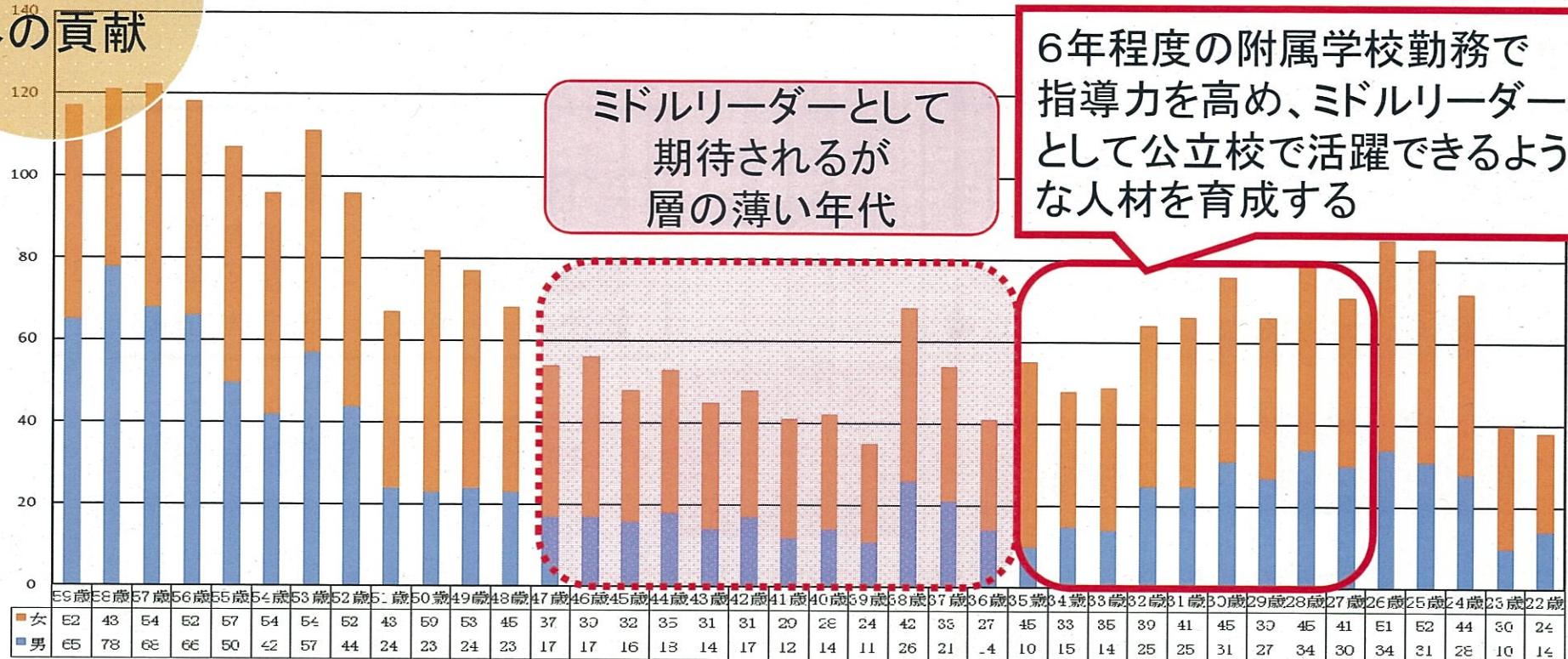


東部教育事務所管内小中学校教員数(H30.4.1)

(校長+副校長+教頭+主幹教諭+指導教諭+教諭+養護教諭)※再任用を除く

ミドルリーダーとして
期待されるが
層の薄い年代

6年程度の附属学校勤務で
指導力を高め、ミドルリーダー
として公立校で活躍できるよう
な人材を育成する



【背景にある課題】

- 今後10年間で教員の世代交代が進み、ミドルリーダーの早急な育成が急務

その他の急ぎ対応すべき課題

教員の働き方改革



- ・休日や夜間の留守番電話対応
- ・教員以外の人材の活用(学校図書館司書、SC)
- ・長期休暇中の学校閉庁 *済み
- ・外部からの委託事業の精選
- ・中学部活動指導の適正化(部数や部活動指導員の登用)
- ・校務支援システムの導入
- ・保護者への配布物のメール配信 *予定

公立校への研究成果の還元



- ・教科研究会の研究主任、事務局
- ・公立校教員との共同研究(研究発表会)

5 坂出学園の改革

(1) 附属坂出学園と地域の課題のあぶり出しと改善素案

附属坂出学園の課題

- (1) 15年前に開発した連携教育が活かしきれていない。
- (2) 合同研修(附坂学園連絡協議会)が年1回形式的になっており、互いの研究が把握できていない。
- (3) 特別な教育的支援が必要な子供が増えている。
(小8. 5%)
すばる連携が通常学級にいかされない。
- (4) 研究発信内容がどれだけ公立で活かされているかつかめていない。
- (5) 虐待事案、不登校事案等が増えるなど、子育てや親子関係に不安をもつ保護者への支援が必要。
- (6) 地域の人が入りづらい場が用意されていない。
- (7) 勤務時間が長い。



課題に対する改善素案

- (1) 一貫学校になることで、15年前の成果をブラッシュアップ
- (2) 幼小、小中、同教科、特小、等のグループ交流や合同研修の必要性のある教育カリキュラムを作成する。
- (3) 研究テーマに入る。特支・すばる・大学のアドバイスを受けられる体制づくり
すばるの個別教材を通常学級で活用。
- (4) 日常の研究授業討議の公開やアンケート調査により公立との双方向の研究スタイルを確立させる。
- (5) 幼小中の養教とSC, SSWと特別支援コーディネータで保護者支援体制の確立する。(香大臨床のアドバイス)
- (6) 地域の人が学ぶ喜びを感じられる場を工夫する。
- (7) 働き方改革プランの作成と実施、研究会隔年開催

地域の課題(聞き取りによる)

- (1) 過疎化による人口減、高齢化、人手不足
- (2) 虐待、不登校、いじめ等の現代的課題
子育て不安、母子関係、発達障害
- (3) こども園化に伴う、保育の指導
- (4) 世代交代による教員の資質能力向上
出張の制限により研究会に出せない
- (5) 幼稚園人事
- (6) 小1プロブレム、中1ギャップ、一貫教育の充実
- (7) 国が進める体験的学習活動等休業日の実施困難



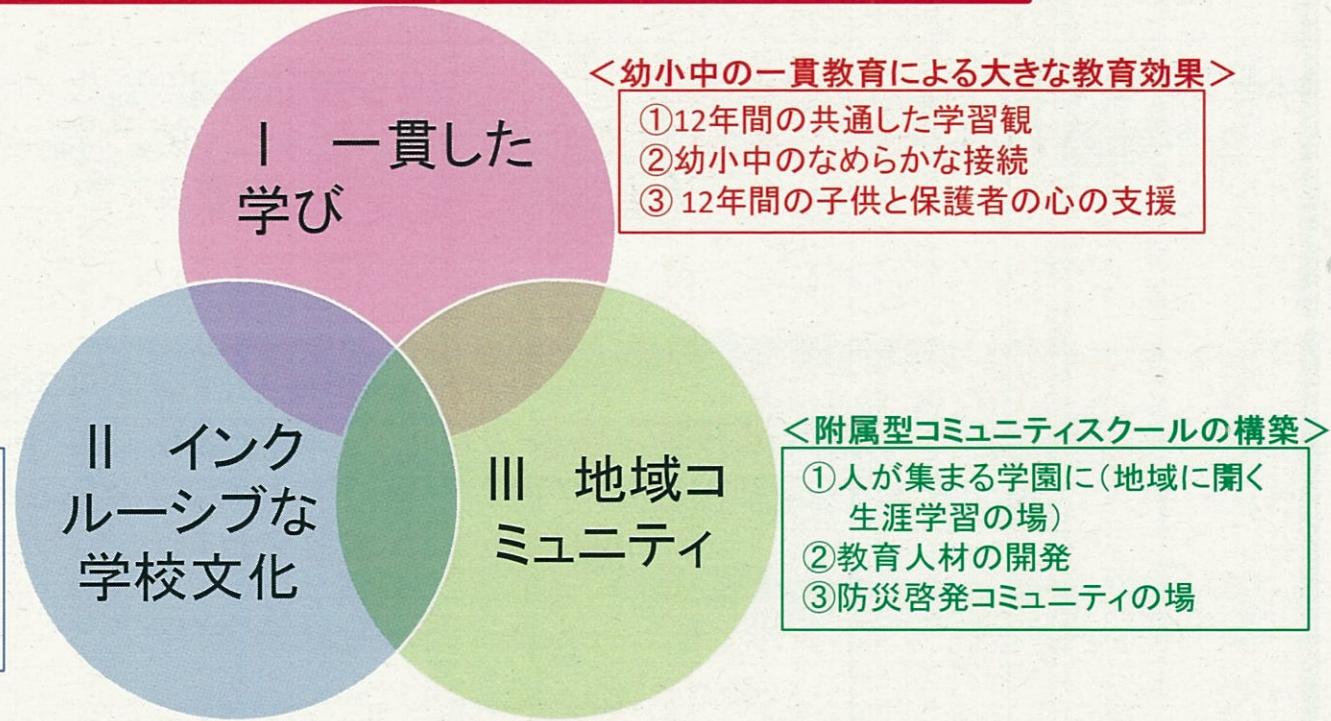
課題に対する改善素案

- (1) 香川に生きる人づくり、教育人材の開発
- (2) 幼小中教育相談、SC, SSW特支コーディネータによるチームの結成
- (3) 「保育について語ろうデー」の開催
- (4) 教育委員会とコラボした研修、日常の研究授業公開
オンライン研修、計画的人事交流(6年若手育成)
- (5) 市町の幼稚園と人事交流
- (6) 接続部分の合同研究、異校種合同研修
- (7) 先行実施による情報の提供

5(2) 附属坂出学園改革コンセプト

～人が集まる魅力ある学園に変身～

香川に生きる人をつくる幼小中の一貫教育



IV 現職教員の資質向上に貢献

- ①県市教育委員会とのコラボ研修
- ②子供のいる実践的な教員研修の場の提供
- ③香川の教科研究団体の運営
- ④異校種教員研修モデルの提供
- ⑤教職大学院の指導教員併任と実践システムの確立

V 幅広い意味のモデル提供

- ①働き方改革に向けた実践事例の提供
- ②国が進める「体験的学習活動等休業日」の実施例の提供
- ③幼小中特支の合同運動会の実施モデルの提供
- ④いじめ、発達障害、SNS、心の問題等現代的課題に対するPTAとの合同研修会のモデル提供

(Ⅰ-①) 附属坂出学園「めざす子供の姿」と12年間の学習観

○自主・自律

幼: 明るく元気に生活する中で、人、もの、ことにかかわり、自分と向き合い伸びていく子供
小: 心も体もたくましく、自ら積極的に人、もの、ことにかかわり、自己を振り返り、磨き続ける子供
中: 心身ともに健康で、自ら積極的に人、もの、ことにかかわり、自己を振り返り、生涯にわたって学び続ける子供

○共生・協同(働く)

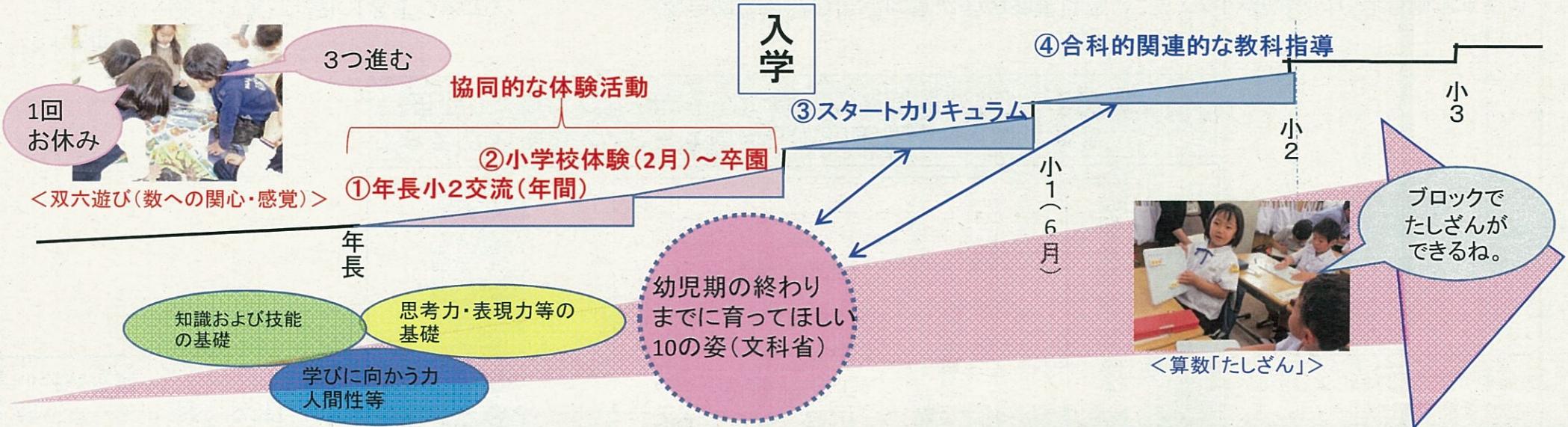
幼: ともに生活する中で、自分や身近な人を大切にする子供
小: 仲間と共に生き、自他や地域を大切にし、進んで誰かの役に立とうとする子供
中: 集団や地域社会の一員として生きる中で、自己の役割と責任を自覚し、自他を尊重し、進んで役立つ行動ができる実践的な子供

○探究・創造

幼: よく見、よく考え、工夫することを通して明日を創造する子供
小: 学びを活かし、様々な分野について探究する中で、よりよい生き方を創造していく子供
中: より高い目標を定め、常に探究的な態度をもち、よりよい社会を創造していく活力のある子供

12年間の学習観 「主体的に意味を作り出していくプロセス」

(Ⅰ-②)学びをつなぐ附属坂出学園幼小接続構想案



環境を通して行う教育

①年長小2の交流

野菜作り、おでんパーティ、おもちゃや祭り等を通して小学校の「ひと、もの・こと」へのあこがれ、楽しみを膨らませていく。

②小学校体験～卒園

①のねらいに加え、小学校生活を体験し、新しい環境との出会いを嬉しく感じたり幼稚園生活に取り入れたりできる環境づくり。

③スタートカリキュラム

遊び→生活科→教科の流れを核に柔軟な時間枠を設定。

教科学習の中での教育

④合科的関連的な教科指導と生活科(日常の時間割へ)

・10の姿をもとに、様々な園から入学してきた子供の経験が活かされるようプラン。

保護者啓発と協力依頼

- ・親子の不安解消のためのスタートブックを配布
- ・子供との会話(聞き取り)依頼とメールシステムを利用したアンケート調査

5月中旬:PTA主催
ウエルカムパーティ

<H31年度の方向性>

- 1 教師の互いの子供観、指導観の共有(10の姿の具体を見つめながら)
- 2 遊びから教科学習へのゆるやかな学びの接続を提言(時間、場、ルール)
- 3 心の支援部との連携



課題

- ・担任が変わっても実践できるようにするシステムづくり
- ・幼稚園の先生の子供理解の経験知をどう身に付けるか

(Ⅰ-②)学びをつなぐ附属坂出学園小中連携構想案

同教科小中合同研修(新)

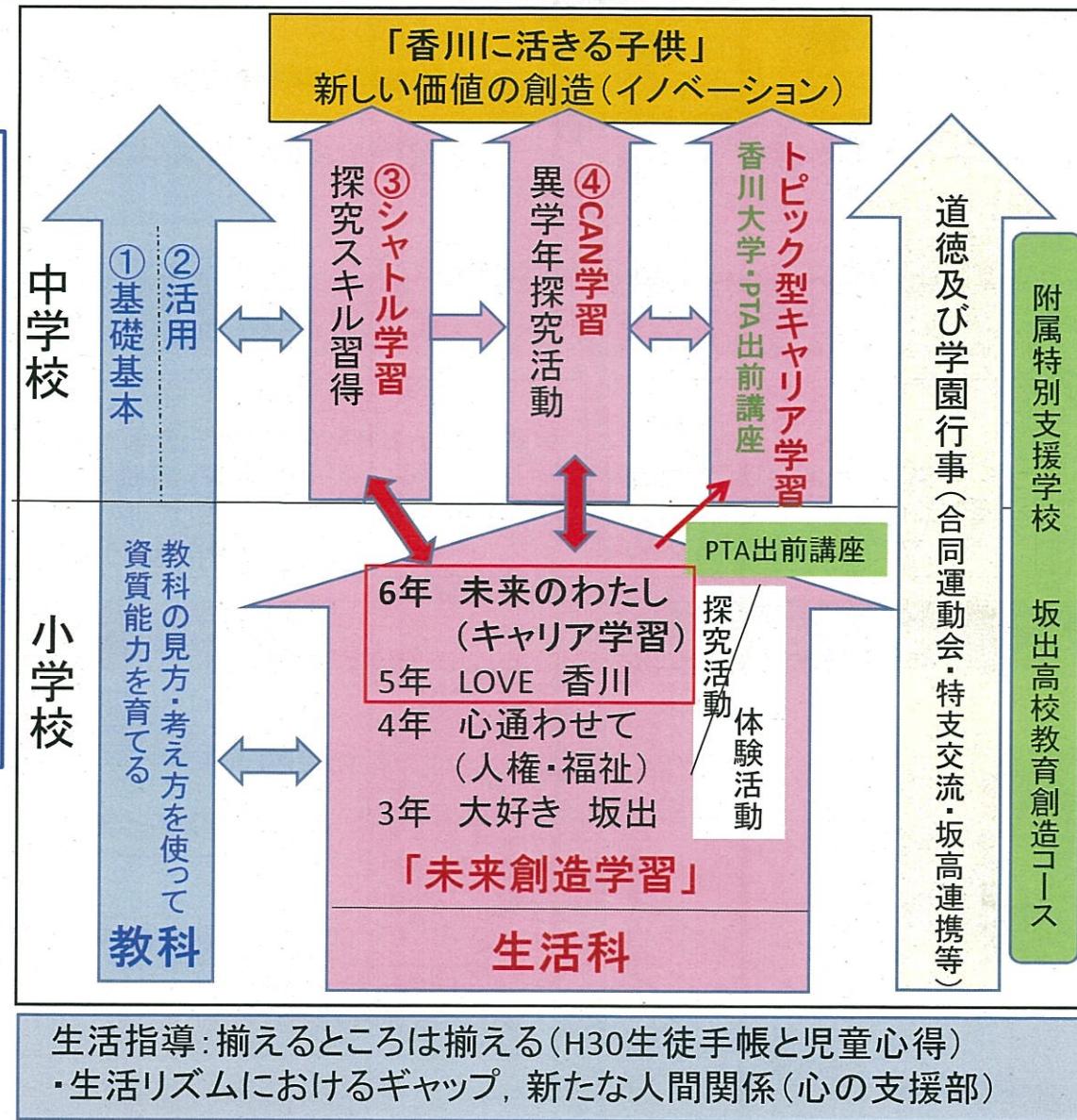
- 互いのよさの共有(中の専門性、小の発問、助言、発達支援等)

- 教科チームで発想・実施。

- 小英語科、中英語科教員とのコラボ

- 小教員の中への乗り入れ、小中子供の合同授業等

教科チームの発案・実践による研究推進



31年度の方向性

- ・互いの校内研究授業・討議に1名ずつ参加。
- ・小中総合チームの結成(管理職、小中総合担当者)

課題

- ・総合的な学習の接続は意欲面の効果は高い。育てたい資質能力をどう測定するか。
- ・同教科小中合同研修の場をどう設定するか(働き方改革との両立)

総合学習の接続の改良

- 小6がCAN学习のパネル発表に参加。中学校へのあこがれと期待。

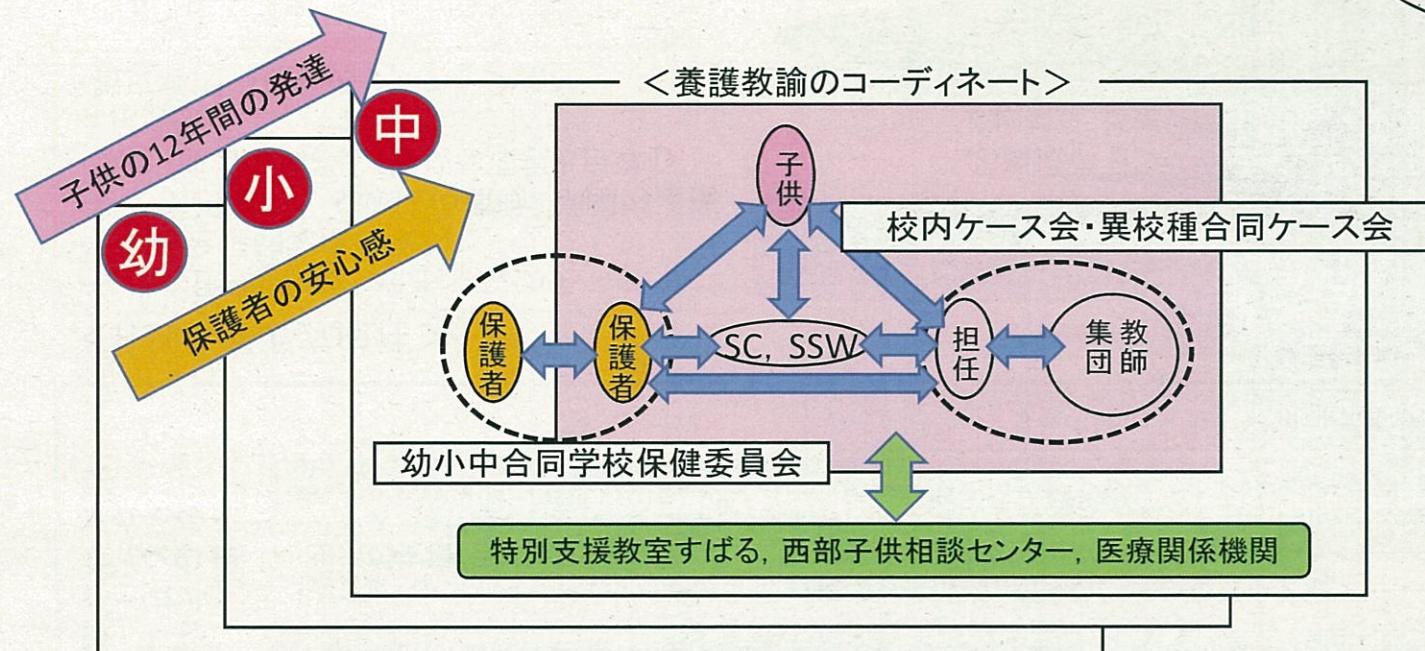
- オープンスクールの大学教授の出前授業に参加。

- シャトルの探究スキルの小学生版を作成予定。

- 坂高生の活用

小中総合チームの案を実践し
修正していく研究推進

(Ⅰ-③) 12年間の子供と保護者との心の支援部の構想案



<これまでの成果>

- 異校種で研修をすることで、互いの時期の子供の心の状態とかかわり方が共有できつつある。
- 養教がSCからカウンセリングやチーム支援のすべてを学び、実践化できるようになった。

<H31年度の方向性>

- ・上記のシステムの効果的活用
幼保護者座談会や朝の登園後の保護者相談による早期支援体制づくり
- ・SC, SSWの予防的活用
- ・現代課題(いじめ、不登校、SNS、虐待等)についてPTAとのコラボ研修の開発等
- ・12年間を貫くバトン(記録簿)の開発
- ・異校種合同事例検討会の充実(回数、持ち方等)及び幼小中合同学校保健委員会の充実



<異校種合同ケース会>

連絡進学する子供の事例から共に考える。幼小、小中、幼小中とそれぞれ計画することで、12年間の発達が研修できる。



○○さんの声かけすてきだわ。我が家でも…

<幼小中合同学校保健委員会>

幼小中の保護者と教員がSCの話を基に一緒に子供の心や接し方を考える。
ピアサポートの効果も見られた。(年1回)

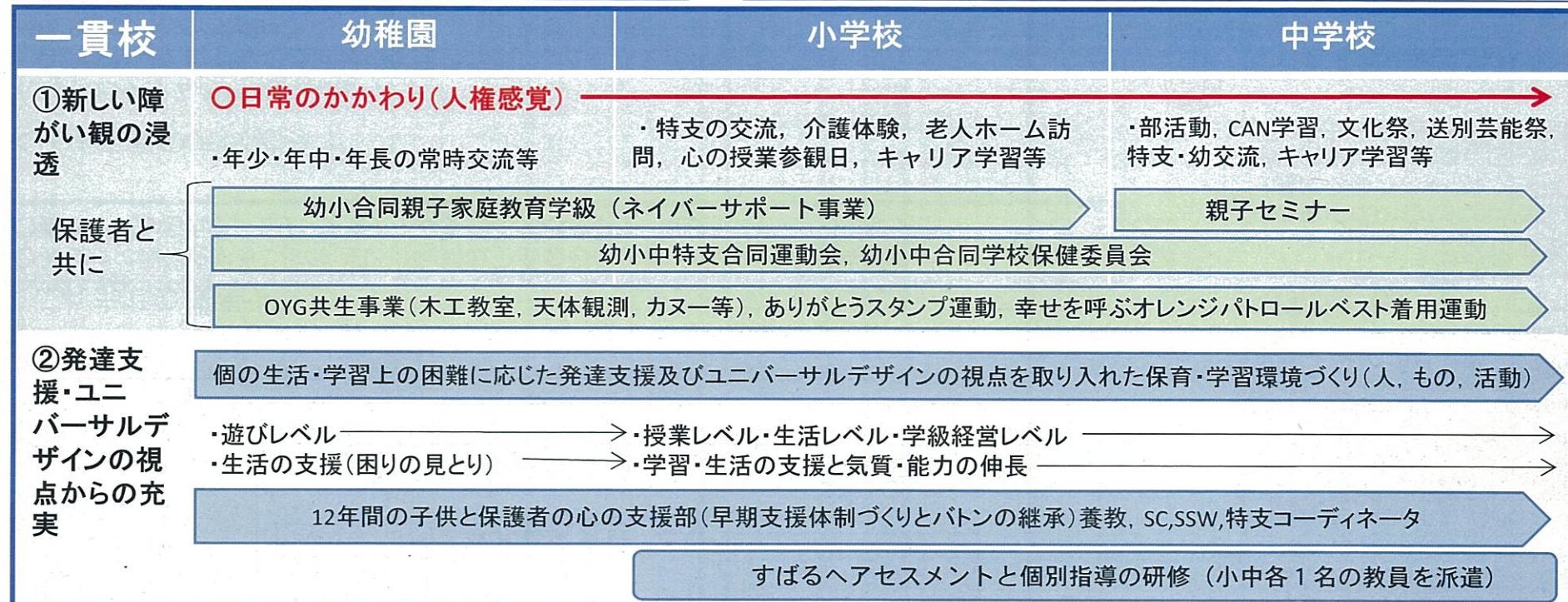
課題

- ・異校種合同事例検討会の合理的な設定(働き方改革の視点)
- ・全職員での共有システムの開発

(II-①②) インクルーシブな学校文化の醸成にむけての構想案

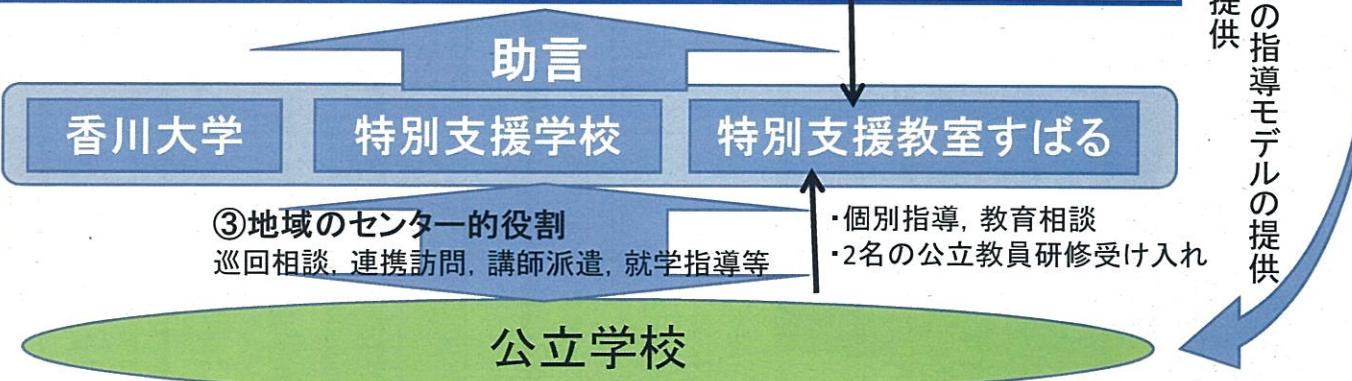
- ①新しい障がい観の浸透(ICF:環境因子と個人因子)
- ②発達支援・ユニバーサルデザインの視点からの充実
- ③地域のセンター的役割(特別支援学校, すばる)

* 有識者会議報告(入試改革)を受けて
学力試験・面接と抽選により、通常学級在籍の多様な子供の確保に努め、その効果的な指導を公立校に発信する。



<H31年度の方向性>

- ・子供の困りや特性に気付くことからスタート
- ・実態と合理的配慮の検討
- ・心の支援部(SC, SSW)との連携, 学園内連携
- ・気質・能力の伸長も(適切な環境と自尊心有用感を)
- ・特支専門の校長のリーダーシップ



課題 文化として根ざすための学園共通意識と継続可能なシステムの構築

(II-③)特別支援学校、すばるの地域及び附属坂出学園内でのセンター的役割

地域(県全域)における役割

<特別支援学校>

○地域のセンター的役割[やまもも相談センター(仮称)]

- ・巡回相談(通常の学級に在籍する発達障害のある幼児児童生徒支援):県教委より巡回相談員を委嘱
- ・連携訪問(幼・保・こども園及び小・中学校特別支援学級担任支援)
- ・地域の学校園からの要請による講師派遣
- ・研修会の開催
- ・教材・教具の紹介、検査器具の貸し出し



<教材・教具の紹介>

- ・特別支援教育事業「やまもも教室」(就学前幼児及び小学生の保護者支援[相談・研修])
- ・市教委と連携した就学指導
坂出市・丸亀市より
教育支援専門委員を委嘱



<やまもも教室>

<特別支援教室「すばる」>

○相談事業

- ・保護者相談・担任支援(電話相談、個別懇談、面接)

○学習指導事業(放課後校外通級指導)

- ・個別指導:各児童生徒、週1回計10回程度

○研修・教育事業

- ・香川県教育委員会派遣内地留学生2名の長期研修
- ・香川大学教育学研究科高度教職実践専攻特別支援教育コーディネーターコース院生の指導実習
- ・視察研修の受け入れ、研修会の実施、通級指導自主勉強会での情報提供
- ・研修会の実施:指導方法、教材の紹介

○研究事業

- ・日本LD学会等での学会発表
- ・学術雑誌等への実践研究の投稿



附属坂出学園内での役割及び連携

<特別支援学校>

○合同開催行事

- ・幼・小・中・特支合同職員会議の開催
- ・幼・小・中・特支合同運動会の実施(交流及び共同学習)

○センター的役割

- ・要請による講師派遣
- ・発達障害等の障害のある幼児児童生徒への生活・学習上の困難に応じた発達支援・相談
- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた保育・学習環境づくり・授業づくりへの助言
- ・特別支援教育コーディネーター連携による早期の気付き・早期対応

<特別支援教室すばる>

○研修・教育事業

- ・通常学級でのクラスSSTに関する助言
- ・指導方法・教材の紹介
- ・研究発表会での指導助言

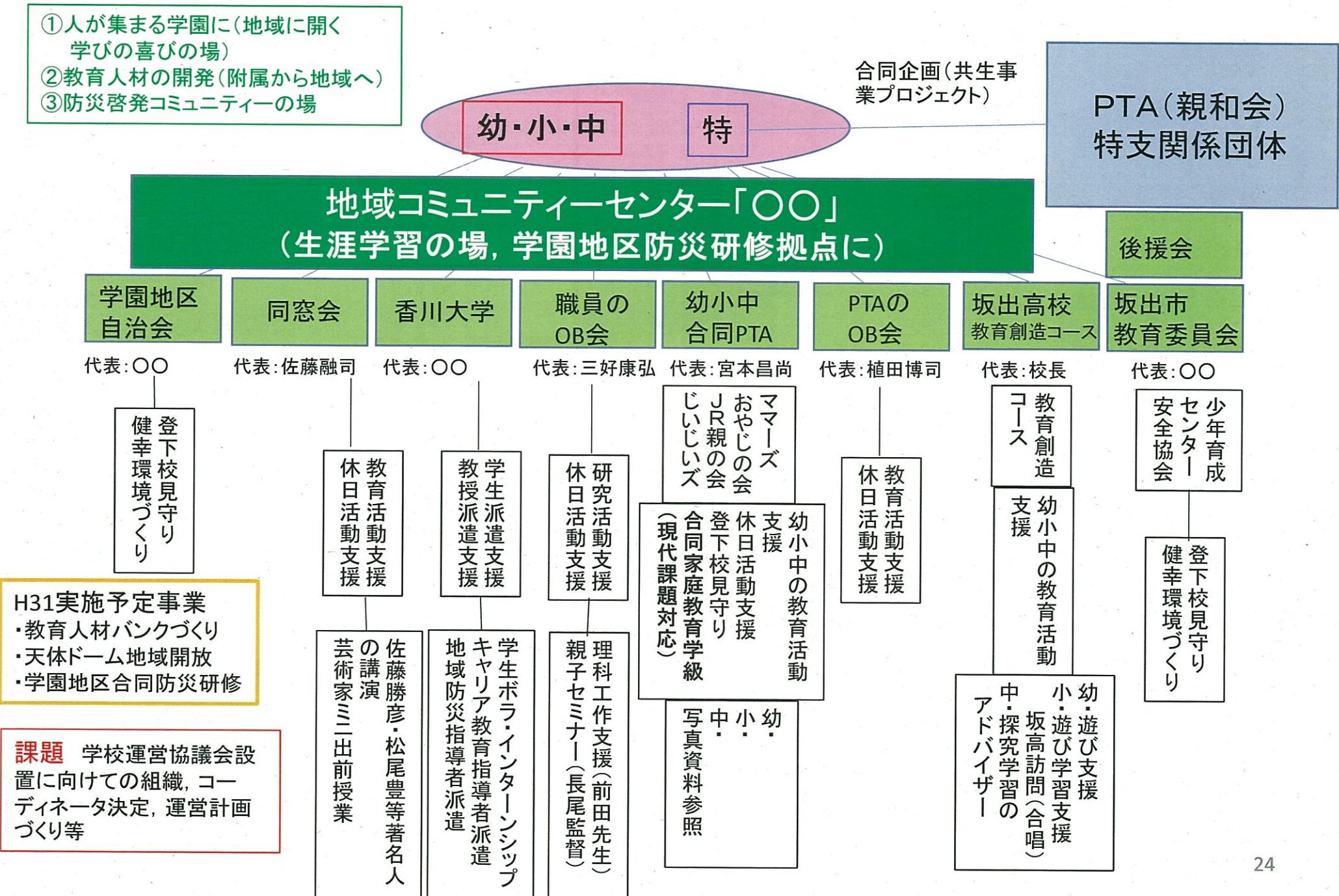
○実践研修(小・中・特別支援学校より教員を派遣)

- ・個別指導を担当するなかでの実践研修



<すばるの教員より学ぶ>

(Ⅲ-①②③)附属型BIGコミュニティースクールの構想案(R元年度に準備, R2年度から実施予定)



(III-②) 教育人材開発(チーム附属坂出学園の協育)

幼小中合同PTA



<小:パトロール(JR親の会)>



<幼:おやつの日(ママーず)>



<小:英語支援(ママーず)>



<小:家庭科支援(ママーず)>



<小中:キャリア学習(保護者)>



<小:いじめ防止教室(保護者)>



<中:天体観測会(おやじの会)>

坂出高校



<幼:遊び(坂高生)>



<小:技能教科支援(坂高生)>



<中:CAN学習アドバイス(坂高生)>

大学3回生(実習生)の公開授業を参観し学ぶ。香大生へのあこがれを。
H31年度高校3年生より実施予定。

<幼小中:教育実習生の授業を参観>

地域関係機関



<幼:もちつき(地域クラブ)>



<幼:獅子舞(保存会)>



<小:安全教室(JR坂出駅長)>



<小:交通教室(坂出警察)>

香川大学



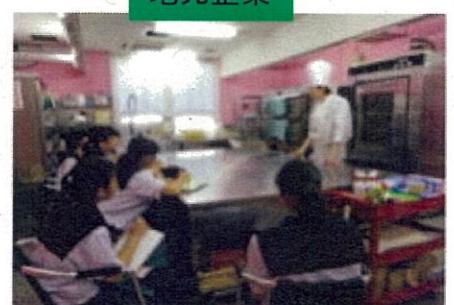
教員OB会



同窓会



地元企業



(III-②) 教育人材開発(附属特別支援学校の協育)

地域の方々



町ボランティア



お話しポケットさん



府中小学校



地元企業



坂出警察



IV 現職教員の資質向上に貢献

(1) 県市教育委員会とのコラボ研修

- ・法令研修の場を提供し協力(県教育センターと)
- ・県教育センターオンライン研修に授業ビデオを提供
- ・中高接続のための**高校教員研修**に協力(高校教育課と附属中学)
- (2) 子供のいる実践的な教員研修の場の提供
- ・日常の研究授業・討議、保育について語ろうデーの公開や特支巡回相談等で公立校と双方向の研究体制を確立。

(3) 香川の教科研究団体の運営

- ・坂出綾歌地区研究会への位置づけ
- ・自主的研修会の開催

香小中研の同好会、木曜会(中)、授業づくりワーク ショップ、土曜授業(小)、

(4) 異校種合同教員研修の場とモデルの提供

(5) 教職大学院のみなし専任拡充と附属での実践システムの確立

(6) 県教育委員会との計画的人事交流

- ・地域の若手リーダ教員を育てる学校(基本6年構想へ)

(7) テレビ会議システムによる研修の導入(大学教授とコラボ研究)

<県や市の施策に協力>

○坂出高校教育創造コース(高校からの教員養成カリキュラム開発に協力)

○坂出市教育委員会への協力(算数数学オリンピック、(予)副読本作成、(予)若年研修等)

特色のある公立校との研修



「公立校との合同研究集会」



「授業づくりワークショップ」



「中高接続のための高校教員研修」



「保育について語ろうデー
(幼保こども園対象)」



「特別支援学校で学ぶ公立小学校教員」



「TV会議による特別支援研修」

V 幅広い意味のモデル提供

(1) 働き方改革例の提供

- ・過半者代表者会と大学との労使協定(残業の上限設定)
- ・大学の指導による勤務時間管理簿の作成

(2) 国が進める「体験的学習活動等休業日」の実施例の提供

- ・アンケート結果、PTAとの協働例

(3) 幼小中特支の合同運動会の実施モデルの提供

- ・いじめ、発達障害、心の問題等のPTAとの合同研修会のモデル提供
- ・PTAおやじの会主催、地域天体観測会の実施
- ・学園地区合同防災研修

V 幅広い意味の「モデル」提案例

国の施策「体験的学習活動等休業日」の実施例(附属坂出小学校、R元年度より幼稚園も実施)

①夏休みを2日間短縮し、10月の最後の木、金、土、日に「親子わくわく4連休」を設けた。4連休の土曜日に「おやじの会」主催のカヌー教室を実施した。

4連休明けの直後に、子供、保護者、教員に「夏休みを2日短縮しての親子わくわく4連休はよかったですか」のアンケート調査を実施した。

<子供>

「よかったです」「どちらかといえばよかったです」の肯定的な回答が88%であった。

主な理由は

○家族で遊びに行って楽しかった。平日はすいていた。のんびり過ごせた。おやじの会のカヌー教室に参加して楽しかった。

●家族が仕事でひま。勉強ばかりさせられた。学校の友だちや先生に会えない。夏休みが長い方がよい。

<保護者>

「よかったです」「どちらかといえばよかったです」の肯定的な回答が62%であった。

主な理由は

○平日のすいているときに家族で遊びに行って子供も喜んでいる。子供と一緒に楽しく過ごせた。おやじの会のカヌー教室に親子で参加して楽しかった。

●親は仕事で休めないので子供だけになる。祖父母の家に預けた。10月よりちがう月を考えてほしい。

<教員>

「よかったです」「どちらかといえばよかったです」の肯定的な回答が100%であった。

主な理由は

○ゆっくり、休めた。

実施してみて

* キッズウィークとなると長すぎるが、4連休ならば、保護者も肯定的意見の方が多い。

・平日に休みが取れない家庭の子供への対応の工夫が課題。「じいじいす」発足や保護者OB会、同窓会、教員OB会とのコラボ検討(BIGコミュニティスクールへ)。

・3連休、4連休くらいの短い連休をいろいろな月に配置する案も保護者アンケートから出た。

・教員は全員が肯定的。働き方改革にもなる。

* 香川県丸亀市がH30年度より実施。意見交換を行った。

丸亀市内で統一の日が決まれば、企業側も協力しやすいとのこと。

商工会議所が企業に働きかけているとのこと(h31.1.7)



おやじの会企画「親子カヌー教室」

V 幅広い意味の「モデル」提案例

働き方改革(附属坂出小学校)

①変形労働制を利用し、春休み、夏休み、冬休みそれぞれ1週間の学校閉庁日「家族サービス健康推進休暇」を設けた。

○教職員は全員賛成、特に春休みは早めに次年度分掌を告げたため、計画的な春休みを過ごせたと好評。家族旅行。

②積極的リフレッシュ年休取得運動による意識改革を図った。遊び脳を働かせ「家族と自分へのご褒美を」。

帰れるときは、1時間年休を取りお楽しみを(R元年度より、「計画的育メン年休」新設:○曜日は保育所の送迎を等)

○年休取得回数はH26は全教員で61回、H29年度は96回、H30年度は136回と記録更新。

○家族で映画を見に行けた。つりに行った。まつりの太鼓台に参加した。こどもと遊べた。年老いた両親と過ごせた。

③サポートスタッフ例:1日6時間勤務講師(15時退庁)に学期末の成績処理が忙しい期間(11/中旬から12月上旬)に、丸付けサポートを15時から17時まで依頼した(時給制:後援会より支出)。

○登下校指導は保護者に頼めるが、丸付けは保護者に頼めないので助かった。成績処理がたくさんあるので助かった。

●遠慮して頼まない先生もいた。→(H31は理科実験サポートスタッフに拡張)

④登下校指導の保護者協力:「JR親の会」の毎日のプラットホームパトロール、PTAの朝の交通立哨。一斉メールシステムで全家庭と全教員に状況報告。パトロールベストも全家庭に配布。

○朝の職員の立哨当番とJRの下校指導が大幅に減り、ゆとりができた。

○立哨記録やパトロールベストの配布・回収・整理業務がなくなった。メールの方が早く保護者に伝わり家庭からの子供への指導が得られる。

⑤部分的ペーパーレス会議の試行:データサーバーに「○月○日職員会」というフォルダーをつくっておき、提案者がその中にPDF資料を入れておく。それぞれがPCの画面を見ながら会議を進める。

○印刷する手間が省ける。ファイルしなくてもサーバにアクセスすればいつでも見られる。経済的。

●考えたり、書き込んだりしたりするときは、印刷物がよいので、さび分けをしっかりとする。

⑥保護者による学習支援(家庭科の実習、外国語)や読み聞かせ:年度始めに募集し、一斉メールで日時や支援内容を知らせる。

○たくさんの保護者が参加してくださって助かっている。支援の質も高く、子供も大喜びである。

(家庭科支援:年間約100時間、延べ約250人、外国語支援:年間約180時間、延べ360人)

○保護者からも、「子供の成長に感心した。」「自分自身も英語の勉強をしてみたくなった」「来るのが楽しい」等の感想が聞かれた。

○昼休みをゆっくり過ごせたり、新しい本を紹介してくれたりしているため、おだやかに過ごせている。(月3回、内1回はALTの英語読み聞かせ)

→H31はインターンシップ型実習(学ボラ)の活用、スタートカリキュラムの支援(スマイルママーず)

⑦実質業務の削減

・入試業務の半減、期末テストの廃止、夏休み6年カルテの縮小、通知表と指導要録の合体(予)

・研究会隔年開催、研究部システムの改革、教育実習の時間制とインターンシップ型実習の導入



ひなたぼっこテラスでの読み聞かせ

